
真実のはざまで

中村熊助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実のはざまで

【Zコード】

N7673A

【作者名】

中村熊助

【あらすじ】

何気なく日々をすごす秘めた過去の持ち主”鈴宮麻樹くすみやまき”。学校で一目置かれる存在の彼女は一風変わった天才少女。誰もが認める彼女の力の裏には秘められたものがあった…。七月一日の午後九時、すべては始まりを告げる。恋人の純一、親友の椿、一度麻樹がふつた彰、恋敵の奈緒、麻樹を妹と重ねる才介という生徒会メンバーをも巻き込み、妖怪と麻樹とそして人間との秘密が今明かされる現代ファンタジー。恋愛も含まれます。

第四章

第4章 水に揺られて…

(いつたい何があつたんだ?)

純一は、見つかるはずのない答えを求めながら隣にいる奈緒のことも忘れてひたすら池に向かって走っていた。

明らかに何かおかしかったと思われる彰の声とせかされるように切られた電話。

どれも純一の不安を後押しするばかりで考えれば考えるほど不安は募り、その感情を携帯を握り締めることで必死に抑えていた。

ただ、一人の親友を信じて…………純一は走った。

「まったく、人間とは脆い生き物だ…。」

「…………くく…」

「彰っ！」

麻樹は必死で彰の名を叫んだ。

何故だか、池に入つてから吐き氣や頭の痛みは引いてきていた。

ヒカリはびりやら亡靈にやられたらしく、「彰と同じく矢をその体に浴びて地面に伏していた。

亡靈を見ないよつて半泣きで麻樹は負傷した彰の背中をさすりついた。

しかし、彰の倒れた背中に触れた麻樹の手にはぬつとうとしたのりのような液体の血が手のひらについただけだった。

彰の背中をさすりついて、肩に、地面に、血がたれていく。

見るに耐えなくなつた麻樹はひとつ息を呑んだが、

(今動けるのは私しかいない…。私がどうにかしなければ…。)

と思い、自分で言い聞かせた。

どうしようもない状況に麻樹はただ眼のない目をきつくみすえて、恐怖心を押し込んだ。

「あなたは私に用があるのでしょ? だつたら、私を攻撃すればいいじゃないですか!」

「彰やあんな女子にまで…。なんで、なんでこんなことするんですか!」

その問いに楽しげに、低くのどを絞り出すかのような凄みの聞いた声で答える。

「あなたは、人間ではないのだよ。」

「え……。」

「彼らはあなたに有害だ。あのような愚か者とともにいるべきではない。われわれにはあなたが必要なのだ。」

答えることができなくて、ただ話に取り付かれるように耳を傾けていたとき、麻樹の声に聞きなれた声がした。

「麻樹！ 何処！？」

「彰！」

必死で自分と彰を呼ぶ声を麻樹は聞いた。

かなり近くまで来ているようだ。

叫ぶ純一たちに対して麻樹は何も応答ができない状況。

途中で椿と鹿内会長に合流し、純一と奈緒の4人が池に到着した。

夏とはいって、夜は暗くこの神社では懐中電灯と月明かりしかあてにならないので、彼らには麻樹や亡靈が見えていない。

「あなたは人のおひかさと結末をその場で見届けていれば良い。」

「…………何をするつもつ？」

麻樹はその言葉に反射的に答えたが、その言葉に答えるともなく亡靈は飛ぶように4人の元へと向かっていた。

麻樹は直感した。これは、『殺し』なのだと……。

そしてあの『靈は、『本氣』であるのだと……。

「4人とも逃げて！椿、お願い逃げて！」

あらん限りの声で叫ぶ麻樹だが、その声は遠くにいる椿には声しか聞こえずただその場にとどまらせる理由にしかなりえなかつた。

「ん・・・麻樹？」

スッと冷たい風が彼女たちのそばを通り抜けた。

ひんやりとした緊迫した空気が肺に流れ込み、身震いした。

風とともに声がした。

「愚かものどもが……。」

「え・・」

はつとして、4人は寄り添い椿は声のした方向へ懐中電灯の光を当てた。

「ひつ・・・・・・・・・・・・」

高く鋭く短い悲鳴が漏れた。皆、息を呑んでその姿を見つめた。逸らしたくても目が食いついて感情に突き動かされ亡靈を凝視してしまつ。

その姿は、月明かりにすけてみえ、一枚の薄い布のように存在が弱く、しかし見る者の気を引き立てた。

麻樹はなおも必死で叫び続けたが、4人は石のよう、術にでもかかつたかのようにまったく動かず、声すら届いていない様子だ。

そのとき、麻樹の瞳に映ったのは池の中央にかかりている神橋に落ちている正敏からもらつた透きとおるような水色のした石のペンダント。

麻樹からおよそ30メートルは離れている石は妙にはつきりと見え、あたりをぼやかした。

そして、石の内部に輝く何かと、

目…が…合つた…。

麻樹の記憶はそこで途切れ、折り重なるように彰の上に倒れこんだ。

彰は半ば消えかける意識の中でそれを見た。

瞬間、池の水が噴水の「ごとく空を舞つた。

耳元で水の音がして、はつと我に返り池を見るとおぼろげに人が倒れている影が一つ見えた。実際はヒカリと彰だったのだが、ヒカリを知らない彼らはあれが麻樹と彰なのだろうと誰もが思った。

一いつの影に機を取られていた瞬間に隙ができた。

「くたばるがいい・・・・・・・。人間どもよ・・・」

いつの間にか、亡靈が4人の2メートルも手前にいた。

かなり距離が狭くなつていて、内心あせりながら何かにすがるような気持ちで椿は目を閉じ、純一と鹿内会長は亡靈に無力ながらの戦闘態勢をとり前に出て、奈緒はその場にしゃがみこんだ。

ひゅつという鋭い風の音がし、亡靈は血のよいに刺さつている矢を抜いて椿たちに投げつけた。

頬に矢の先端が当たつて暖かい血が自分の頬を垂れていくのを椿

は感じた。

その瞬間に、耳元の水音が大きくなり、やがて池の水は竜のような、うねりを見せながら噴水と化し椿たちと亡靈に向かって、彰に向かつて、ヒカリに向かつて、麻樹を凝視する彰に向かつて水を力の限りぶつけた。

思いつきり頭から水を浴びて、4人とも田瞑つた。

亡靈は声なき声を上げながら、満足そうにすうと消えるように水に溶けるように、空へ帰つていった。

噴水の中心の神橋の上では、麻樹が一人ぽつんと水面に立ち池の水たちに指示をするかのように、堂々と立ち手を空へかざしていた。

その姿は、水神のような神秘的なものだつた。

彰はその後ろで倒れながらも朦朧とした意識の中で神橋に立つ麻樹を見た。

(何だ!? 一体何が起こつてる…?)

困惑を続ける彰の目に映つた麻樹は濡れた髪は輝きを失わずに月明かりに照らされ水のごとく光り、半透明の一本一本の髪が風に揺れては水を揺らした。

眼も色が黒でなく深い藍になつており、凜とした視線は先ほど木をつたつて現れたレイを冷たく見据えていた。

レイもまた冷たく麻樹を見据えた。

(ヒカリはしぶじつたのか・。)

レイもまた自分の手を空にかざし、ぼそりと何かをつぶやいた。

するとふっと麻樹が視線を逸らし、そのまま崩れるように水へ倒れこむところをレイが支え、彰の隣に置いた。

そして、ヒカリを背負つて逃げるよつとその場を立ち去つた。

椿たちは水を浴びて呆然としたものの、懐中電灯を持ち直し先ほど人影が見えたところへ走つた。

不思議なことに水がかかつても懐中電灯は壊れなかつたし、椿の頬の傷も治つていた。

怪奇現象とはいうことのなのだろうか…。

恐る恐る光を当てるとなれている麻樹と彰だつた。

一人とも樹を失つてゐるだけのようだ、全身びしょぬれだが彰の傷も治つていた。

しかしシャツににじんだ血はそのままで、破れたシャツを見て、純一はあわてて彰のところへかけた。

「彰！」

返事がない。

何度もあわてて名を叫ぶと暫くして彰が目を覚ました。

「あえ？」ほりほりほり・・・

水が口に入つていたらしく少々むせてはいたが、以上はない様でほつと息を漏らして純一は彰に微笑んだ。

ほつとして彰は純一の服を掴んで、必死に訴えた。

「鈴富が狙われてるんだ！変な亡靈と女の子が戦つて…。
なんか鈴富はほんとの名前じゃないとか、死ぬとか、俺どじょう！もう意味わかんなくて…」

息が上がつて、必死な彰を見て純一は安心させるように囁つた。

「落ち着けよ、彰。麻樹は大丈夫みたいだ。お前の横にいるだろ。」

彰は自分の横にいる麻樹を見て驚きながらも安心して純一の手を借りて立ち上がった。

確かに麻樹はそこにいた。いつもとかわりのない黒田と黒髪。
しかし彰は見てしまったのだ。

急に彰は純一に対して後ろめたさを感じて無言で純一の手をなにげなく振り切つた。

「純一君ー、麻樹の目が覚めないのー。どうしようつ。」

奈緒があせつた様子で純一に向かへ。

彰は引きついた顔で一連のことと言つべきかどうか迷つたが、皆が信じるはずもないと思つた。自分の記憶の片隅に封じ込めた。

「麻樹！」

必死で純一が呼んでも、麻樹は目を覚まさなかつた。途方にくれていると、正敏がやつてきた。

「おじさんー！」

すがりつゝように椿が正敏のもとへかけていく。

自信がないが、椿はあつのままの先ほどの怪奇現象の話をした。

説明がつましくいかず、何度も何度も説明を繰り返した。

正敏は質問もせず、椿の話をうなづきをしながら聞いていた。

話が終わると正敏は一瞬顔を厳しくしてからすぐには口に言つた。

「麻樹も疲れているだけだろい。もう10時だしな。君たちは今日は帰りなさい。」

渋々とうなづき、樹にかかるふとそれを胸に多く抱いたままバラバラな気持ちのまま、一同は解散した。

神橋にはレイとヒカリが立ち、細かく割れたあの麻樹のものだったペンダントを見下ろしていた。

粉々に細かく割れたペンダントは石の輝きを失い、澄んだ水色はよどんだ灰色になっていた。

そして、負傷しているヒカリは自分を自分で何か光を体から発し、治癒している。

それをみてレイが空の月を振り返りぼそりとつぶやいた。

「…………惣殿…………。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7673a/>

真実のはざまで

2010年10月20日18時53分発行